南島原市文化財調査報告書　第３集

原山新田遺跡

２０１０

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

島原半島の南東部に位置する南島原市は，有明海に面し，背後には雲仙山系の山々がそびえるという自然豊かな土地柄のもと，深い歴史を積み重ねてきた地域であります。大陸文化の影響を受けたとされる原山支石墓群，有馬氏の居城である日野江城跡，島原の乱の最終決戦の地原城跡などをはじめとして，180を越える遺跡が市内各所に点在しています。

今回報告を行う原山新田遺跡は，原山地区畑地帯総合整備事業に際して実施した試掘調査によって新たに発見された遺跡です。

南島原市は，大陸文化の影響を受けて成立する弥生時代の様相を考える上でも非常に重要な地域でありますが，特に原山新田遺跡に隣接する原山支石墓群は，大陸系墳墓である支石墓の墳墓遺跡としては国内最大規模であり，国指定史跡としてその重要性が認知されています。一方，墓域が発見されていながらも居住域は不明であるなど多くの研究課題を持っている遺跡でもあります。

そうしたなか，原山新田遺跡の発掘調査を実施することができたことは，非常に意義のあることだといえます。調査の結果，原山支石墓群とほぼ同時期と考えられる遺物も確認され，原山地区の歴史の解明に貴重な成果を得ることができました。

今後こうした成果とその蓄積が多くの場面で活用され，また後世に受け継がれていくことを願ってやみません。

最後になりましたが，調査を実施するにあたり格別のご配慮とご理解を賜りました事業関係各位と地元の方々，調査のご指導・ご助言をくださいました長崎県学芸文化課の先生方，発掘調査にご協力いただきました作業員の皆様に心から御礼申し上げます。

平成22年３月26日

南島原市教育委員会
教育長　菅　　弘賢

例　　言

1　本書は，原山新田遺跡（長崎県南島原市北有馬町所在）の発掘調査報告書である。

2　調査は，長崎県が事業主体である原山地区畑地帯総合整備事業に伴って実施した。

3　調査は，長崎県南島原市教育委員会が主体となって実施した。

4　調査における土層実測及び写真撮影は，木村岳士（現南島原市教育委員会スポーツ振興課）が行い，遺構実測については，㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

5　遺物の実測及び写真撮影は，本多和典が行った。

6　本書に関する遺物，図面，写真等は，旧深江町学校給食センター（南島原市深江町）において保管している。

7　本書の執筆・編集は，本多による。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに……1
　第1節　調査に至る経緯
　第2節　調査の期間と面積
　第3節　調査組織

第Ⅱ章　位置と環境……2
　第1節　地理的環境
　第2節　歴史的環境

第Ⅲ章　試掘調査……4
　第1節　試掘坑の設定
　第2節　試掘調査の成果

第Ⅳ章　本 調 査……11
　第1節　本調査区の設定
　第2節　本調査の成果

挿　図　目　次

第１図　原山新田遺跡位置図……2
第２図　原山新田遺跡周辺図……3
第３図　試掘坑配置図……5
第４図　試掘坑土層実測図①……6
第５図　試掘坑土層実測図②……7
第６図　試掘坑土層実測図③……8
第７図　試掘坑土層実測図④……9
第８図　出土遺物実測図①……10
第９図　本調査区土層実測図①……12
第10図　本調査区土層実測図②……13
第11図　本調査区遺構図（上層面）①……14
第12図　本調査区遺構図（下層面）②……15
第13図　出土遺物実測図②……16

図　版　目　次

図版１　調査前風景……17
図版２　試掘坑掘削状況①……18
図版３　試掘坑掘削状況②……19
図版４　試掘坑掘削状況③……20
図版５　検出遺構……21
図版６　出土遺物……22

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

原山地区畑地帯総合整備事業が計画されたため，平成19年度に試掘調査を実施した。その結果，原山新田遺跡が新規に発見されたため，事業主体である長崎県島原振興局をはじめとした関係機関と協議を行い，遺跡にかかる沈砂地予定地について同年度に本調査を実施した。

第２節　調査の期間と面積

試掘調査及び本調査の調査期間と調査面積は以下のとおりである。

試掘調査

調査期間　平成19年７月５日～平成19年８月29日

調査面積　合計　88.6㎡（試掘坑23箇所）

本 調 査

調査期間　平成19年10月26日～平成20年３月26日

調査面積　267㎡

第３節　調査組織

調査主体及び調査担当は，以下のとおりである。

調査主体

南島原市教育委員会	教　育　長	菅　弘賢	
	教育次長	井口　敬次	
	文化財課長	但馬　健剛	
	文化財課文化財班長	松本　慎二	（～平成19年度・現世界遺産推進室）
	同　　上	林田　順助	（平成21年度～）

現地調査担当

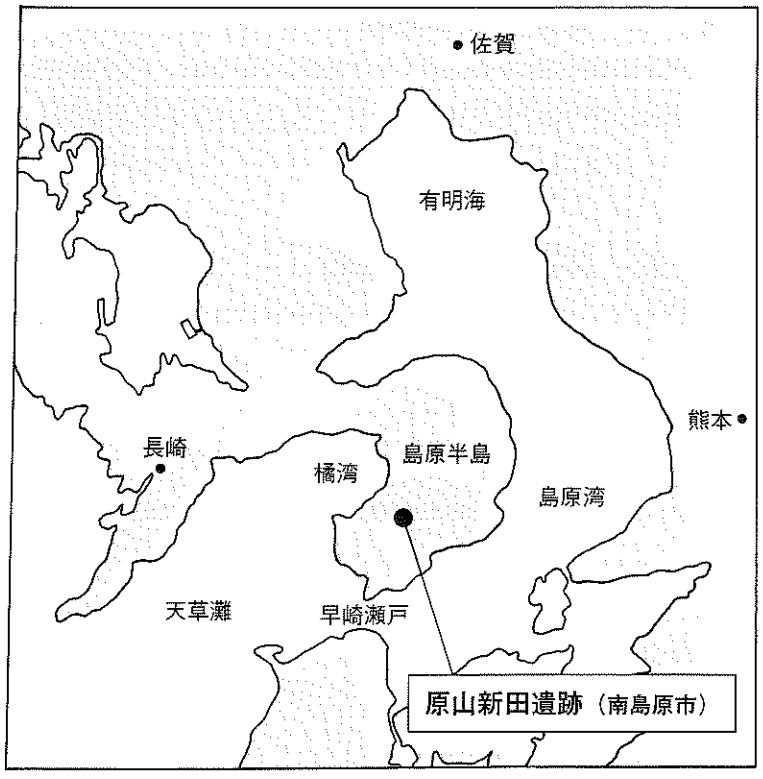
南島原市教育委員会　文化財課文化財班　主査（学芸員）　木村　岳士（～平成20年度）
（現スポーツ振興課スポーツ振興班）

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

原山新田遺跡が所在する南島原市は，愛野地峡で諫早方面に通じる島原半島の南東部に位置している。市の東海岸は有明海の開口部である島原湾を挟んで熊本平野や宇土半島，天草地方と対峙し，早崎瀬戸を抜ければ，橘湾と天草灘の先に長崎半島を望み，さらにその先は東シナ海へと通じている。

島原半島の中央には，普賢岳（1359.3m），平成新山（1482.7m），妙見岳（1333m），国見岳（1347m）などが複合火山として形成されている。1990（平成２）年には，普賢岳が198年ぶりに噴火し，その後の火砕流や土石流などの火山災害は甚大なものであった。



第１図　原山新田遺跡位置図

第２節　歴史的環境

原山新田遺跡は島原半島南部の山麓部に位置するが，周辺遺跡としてまずあげられるのが原山支石墓群である。縄文時代末期～弥生時代初頭に位置づけられている原山支石墓群は，３群からなる支石墓群で，消滅した墳墓も含めると100基以上からなる。その多くが，下部構造に板状の石材を用いた石棺を採用していることを特徴としている。また，発掘調査の履歴はないが，諏訪の池の周辺には旧石器時代，縄文時代の遺跡群が知られており，水位の下がったときなどは石器類の採集が可能であるとされる。原山新田遺跡や原山支石墓群からは１km前後の距離にあり，両遺跡と密接に係る地域であることも想定される。

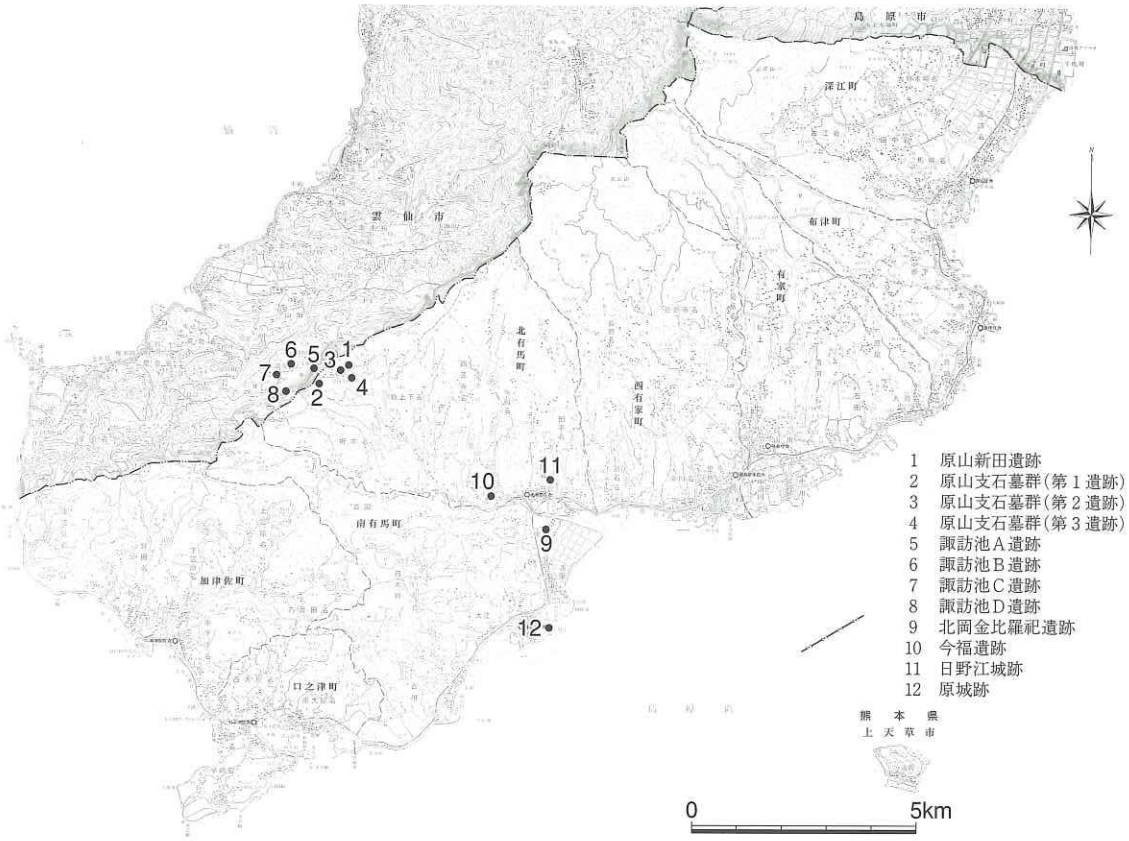
一方，有明海側に下ると，代表的な遺跡として弥生時代の北岡金比羅祀遺跡，今福遺跡，中世～近世初頭の日野江城跡・原城跡があげられる。

北岡金比羅祀遺跡では，明治42（1904）年に石囲いのある合口甕棺から銅剣１本が出土したと伝わっている。今福遺跡は，弥生時代中期～古墳時代初頭を主体とした遺跡で，県教育委員会による調査によって，竪穴式住居２棟，甕棺墓５基，土坑墓１基，環濠１条などが確認されている。

日野江城跡は，キリシタン大名有馬氏の居城として知られており，これまでに旧北有馬町教育委員会によって二ノ丸地区を中心に調査が進められ，階段遺構や掘立柱建物跡などが検出されている。原城跡は，1637年の島原の乱の舞台となった地であり，本丸地区の発掘調査が旧南有馬町教育委員会によって実施されており，一揆軍が身につけたキリシタン関係遺物，戦死者の人骨，乱後の破却の状況などが確認されている。

［参考文献］

長崎県教育委員会『原始・古代の長崎県　資料編Ⅱ』1997年



第2図　原山新田遺跡周辺図

原山支石墓群

日野江城跡

原城跡

日野江城跡階段遺構

第Ⅲ章　試掘調査

第１節　試掘坑の設定

事業区域内において50m方眼を基本として各方眼に１箇所，平面２ｍ×２ｍを基本とする試掘坑を23箇所に設定し，人力による試掘調査を行った。試掘坑の調査面積の合計は88.6㎡である。調査にあたっては，状況に応じて検出した遺構等の性格をつかむため追加の試掘坑を設定した。

第２節　試掘調査の成果

検出遺構

遺構としては，TP.２，TP.４，TP.９，TP.16，TP.18，TP.19において柱穴が確認された。また，TP.２，TP.３，TP.４，TP.12，TP.16，TP.19においては土坑が確認された。遺構内からの遺物の出土はないため，時期の特定には至っていない。

出土遺物（第８図）

全体としては明確な遺物包含層としてとらえられるようなまとまった遺物の出土は見られないが，散発的に土器片や石器の出土がみられた。

出土遺物については,4点の資料について図化した。

１はTP.14の２層から出土である。深鉢口縁部の資料で，大きく外反する。調整は，外面が貝殻条痕調整ののちナデ調整を施し，内面がナデ調整である。おそらく礫石原式期の深鉢と考えられ，この時期に特徴的な小礫を多く含む胎土である。焼成は良好，色調は，内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

２はTP.14の３層出土である。深鉢の直立する口縁部の資料である。内外面ともに擦過調整を施す。焼成はやや不良で，色調は内外面ともににぶい黄橙色である。

３はTP.14の２層出土である。深鉢の張り出しを持つ底部の資料である。復元底径は11.4cmを測る。内外面ともにナデ調整で，焼成は良好である。色調は外面が黄橙色，内面が黒褐色である。

４はTP.14の３層からの出土で，黒曜石の石核である。不純物をあまり含まない良質の黒曜石である。長軸3.3cm，短軸1.6cm，高さ1.3cmを測る。長軸方向の両端からの剥離によって形成された平坦面を打面として，最終的に下方へ連続して剥離を行っているが，その剥離は限界に達し，いずれも小片である。

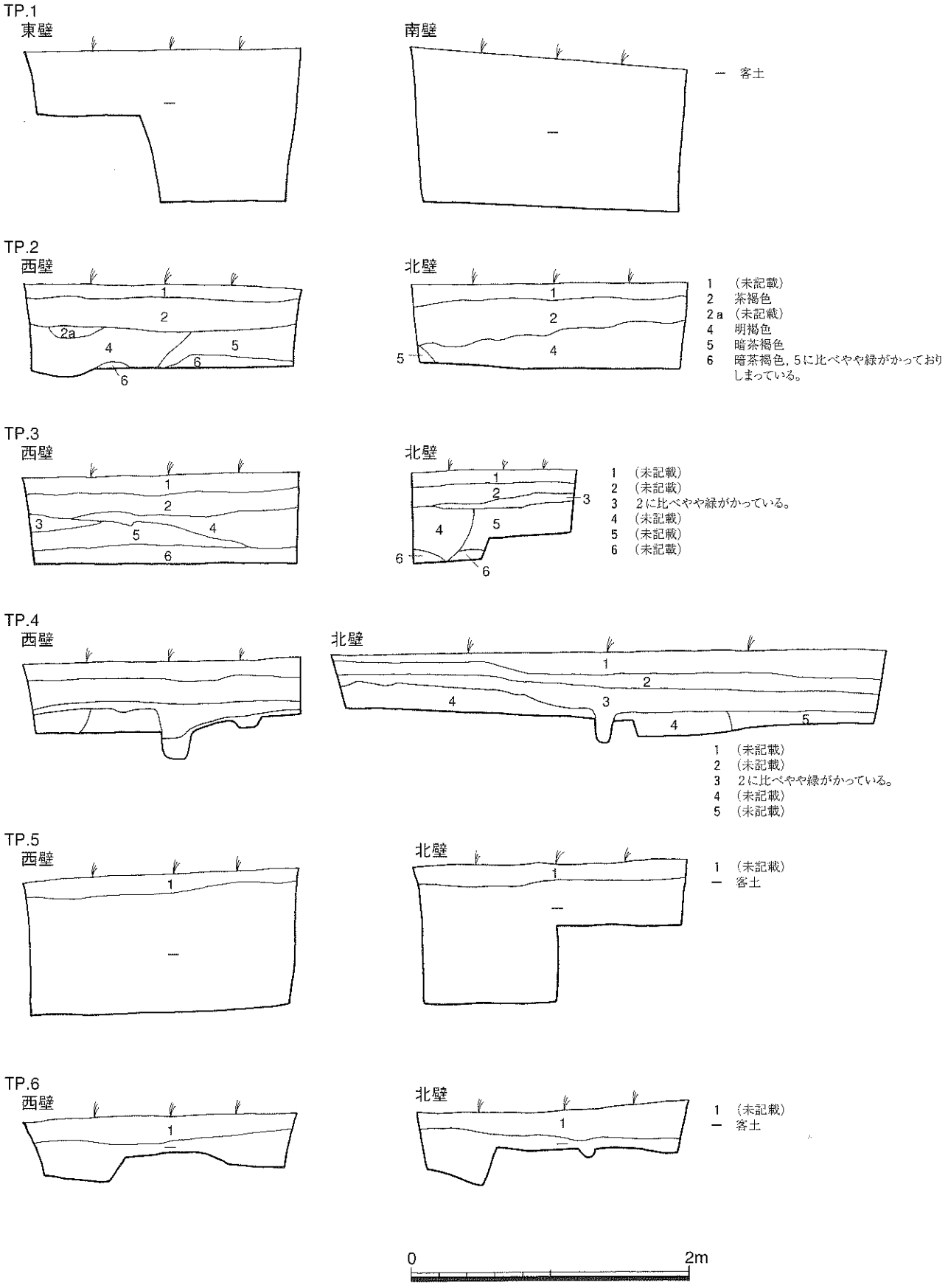
遺跡の範囲

試掘調査の結果をふまえ，TP.18・TP.19の周辺について，新規発見の遺跡として，原山新田遺跡が登録されることとなった。位置的には原山支石墓群（第２遺跡）の北東部に隣接する地点である。

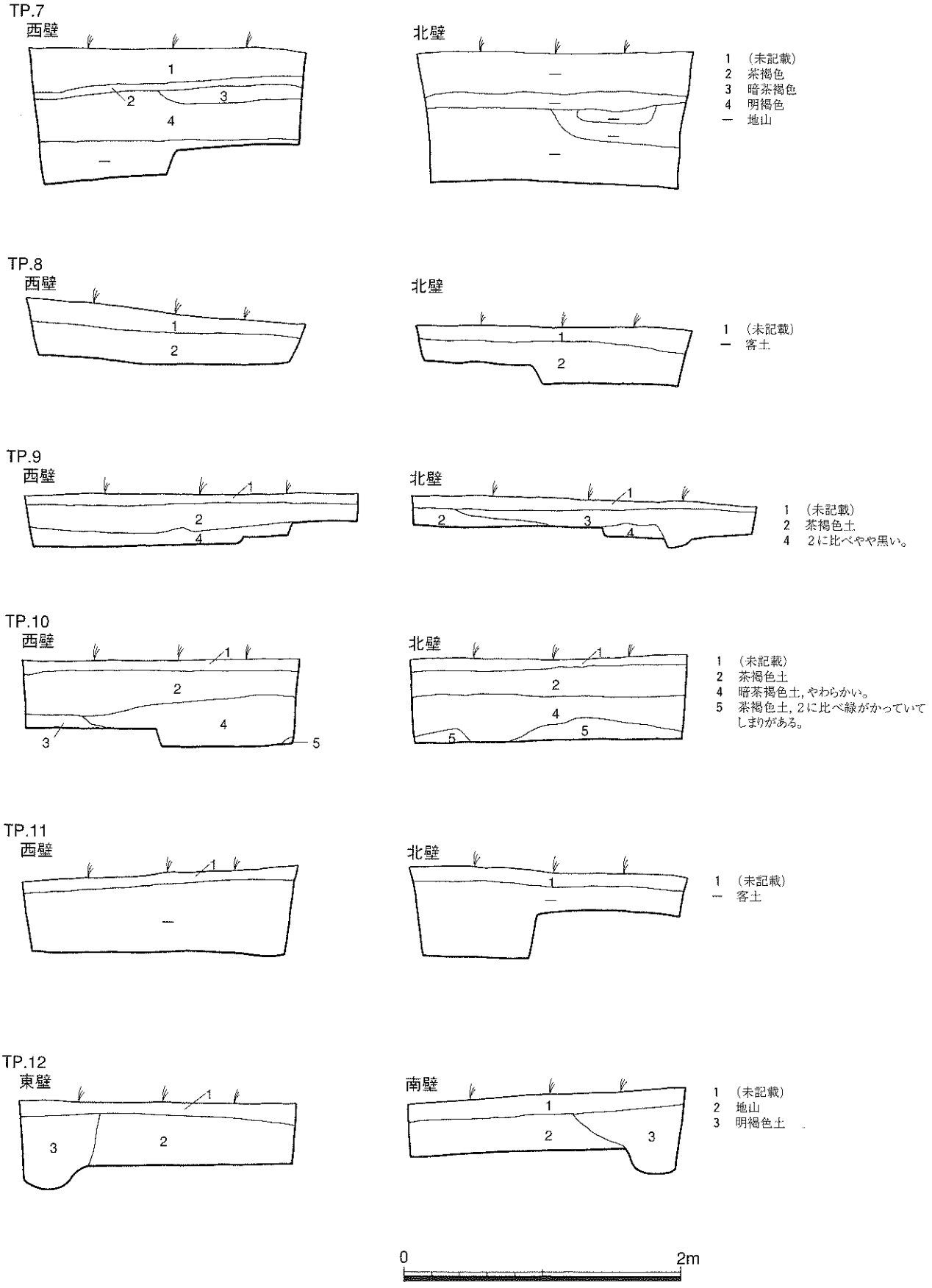
TP.2～4、TP.12・13の詳細な位置関係は不明。

0　200m

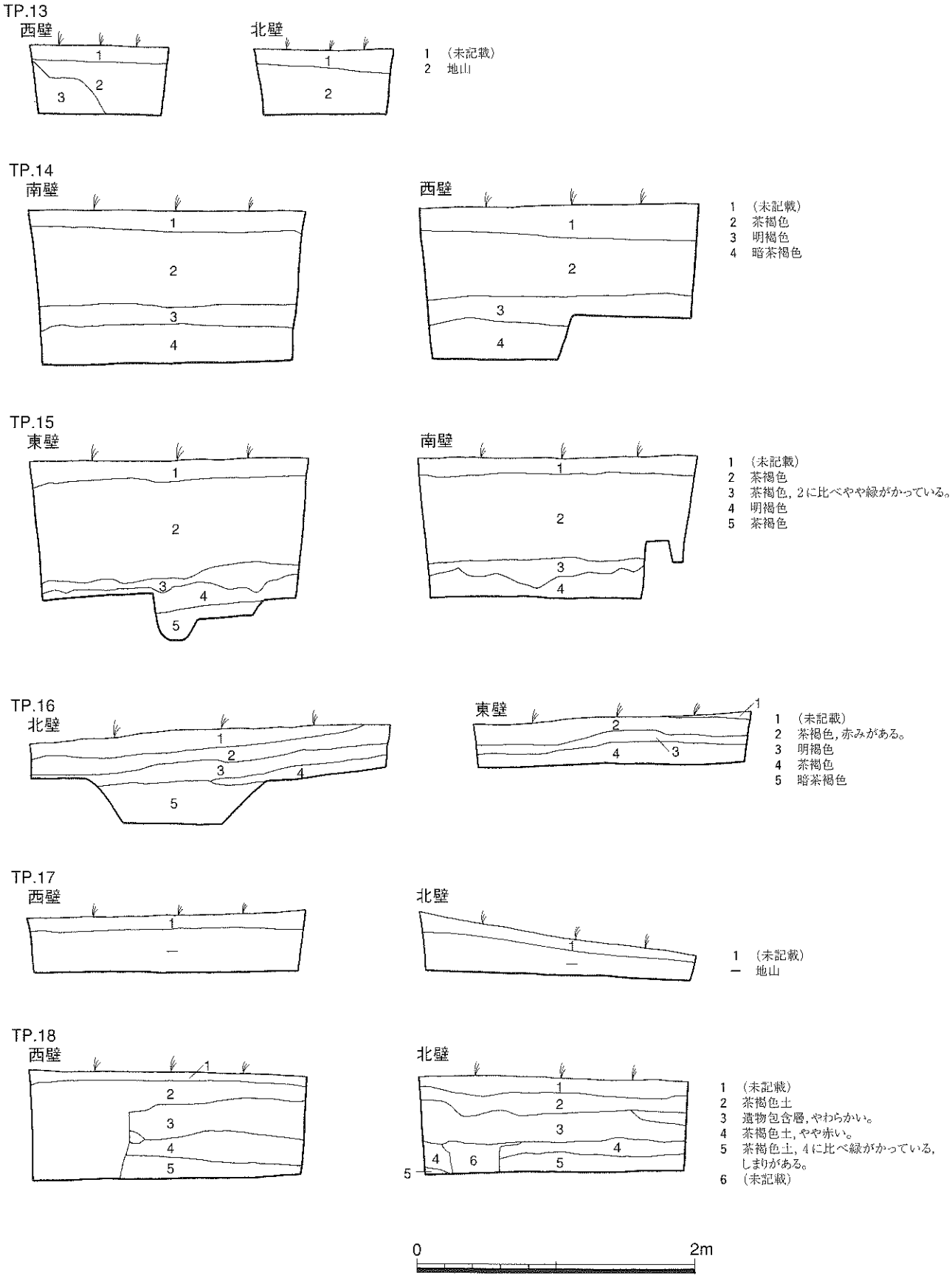
第3図　試掘坑配置図（S＝1/6,000）



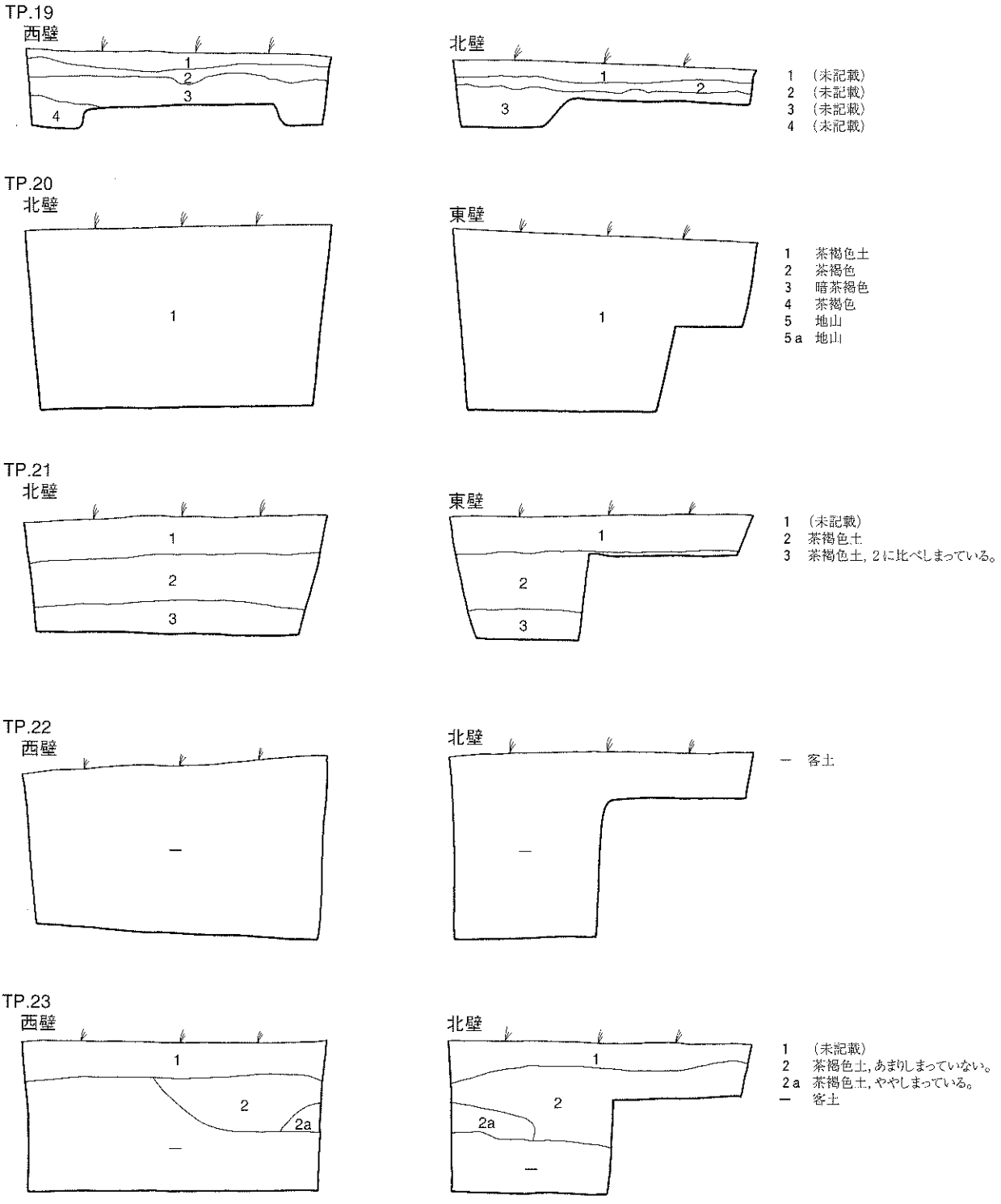
第4図　試掘坑土層実測図①（S＝1/40）



第5図　試掘坑土層実測図②（S＝1/40）



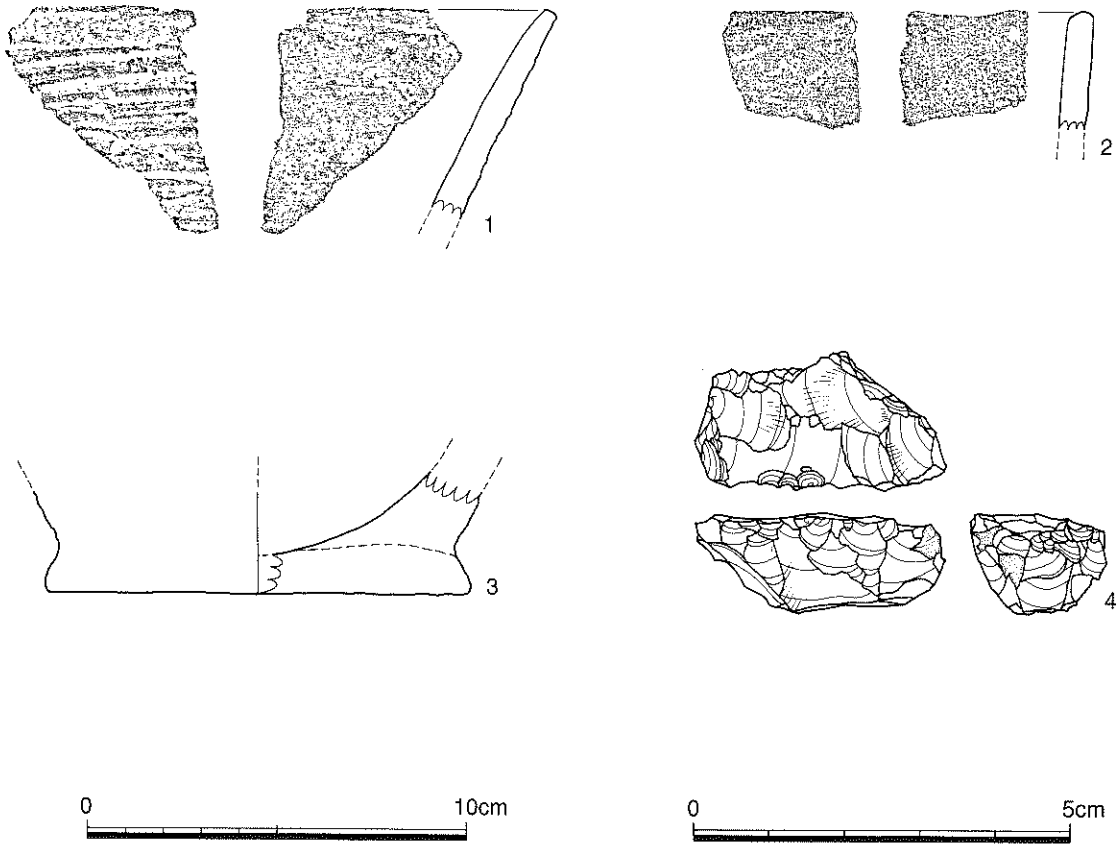
第６図　試掘坑土層実測図③（S＝1/40）



層序及び土色・土質の注記は, 調査担当者によって作成された土層実測原図及びその複写資料の記載に基づく。標高については, 記載漏れのため不明であるが, 240m前後の標高域が調査対象となっている。

0 2m

第7図　試掘坑土層実測図④（S＝1/40）



第８図　出土遺物実測図①（１～３：S=1/2，４：S=1/1）

第Ⅳ章　本 調 査

第１節　本調査区の設定

調査は，まず重機による表土剥ぎを行い，その後，長軸約23m，短軸約９mの調査区を設定した。調査区を設定した箇所は，事業計画において沈砂地となる地点であり，試掘・範囲確認調査においてはTP.18，TP.19を設定した地点の隣接地である。

第２節　本調査の成果

検出遺構

検出した遺構には，近世以降の柱穴や土坑がある。柱穴の並びに規則性はみられず，建物跡を構成するような配置は認められない。土坑については，現地調査時に遺構図作成等の記録を行っていないため詳細は不明であるが，記録写真から判断する限り，掘り込みに礫を投じたような状況を見ることができる。開墾等による不要な礫を廃棄するための土坑である可能性も考えられる。柱穴内，土坑内からの出土遺物は確認されていない。

また調査区長軸を縦断するように北西から南東へと下る自然流路を検出した。流路の底面には大小の自然礫が帯状に並んだように検出されているが，おそらく混礫層の上面が流水で洗われた結果であろう。

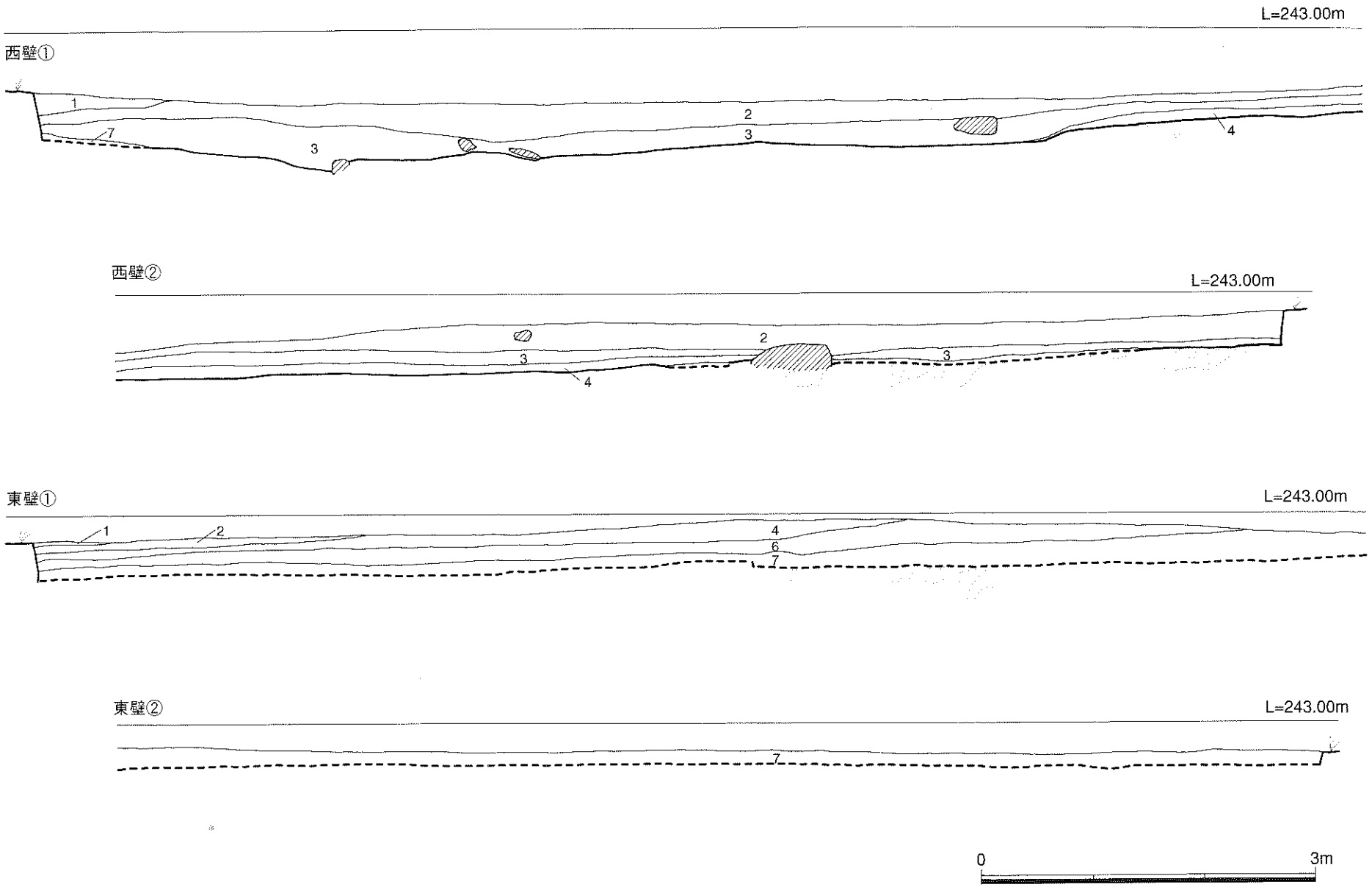
出土遺物

本調査において出土した遺物は，４片の陶器片があり，１個体に接合した（第13図**5**）。第１層からの出土である。全面に透明釉がかかるが，外面は高台畳付部分のみ釉はぎを施し，内面は見込み部分に蛇の目釉剥ぎを施す。内外面浅黄色を呈し，外面には赤色の，内面には赤色・水色の絵入れがなされている。高台には目痕が３ヶ所残る。

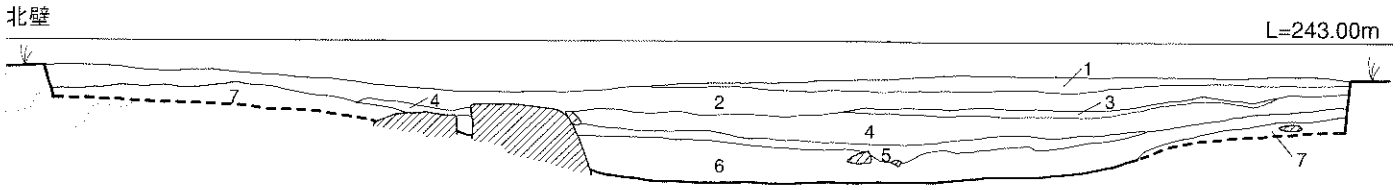
表採遺物

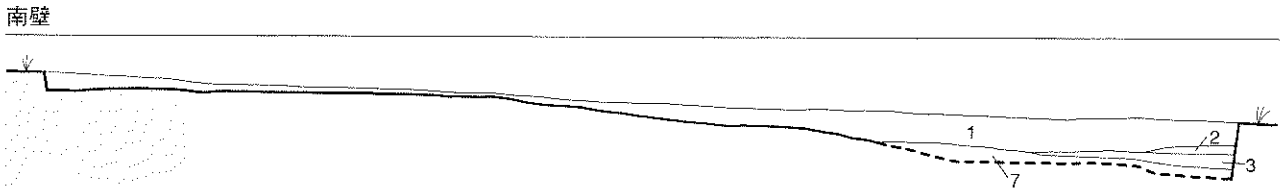
試掘調査及び本調査からの出土遺物とは別に，若干の表採資料があるので，報告しておきたい。TP.５，TP.６，TP.７，TP.11，TP.14の周辺において計13点の黒曜石の採集資料がある。そのうち２点を図化した（第13図**6**・**7**）。いずれも不純物の少ない良質の黒曜石を素材とした石鏃である。

今回の調査地点は，隣り合う２つの小丘陵のちょうど中間地点にあたる谷地形の部分であり，調査区を縦断するように自然流路が形成されていることからも，居住の場としては不適当な地点であったものと考えられる。原山新田遺跡の主な時代としては縄文時代末期～弥生時代初頭及び近世以降が考えられるが，その主体部は周辺の別地点を想定しておかなければならないであろう。踏査では遺物の表面採集が可能であり，縄文時代あるいは原山支石墓群の造営と同時期の弥生時代初期の生活の痕跡が残されていることもうかがわれる。原山支石墓群を造営した人々の居住域は現在までに特定されてないが，原山地区においてその存在を探索することは今後の課題である。今回は，そうした生活領域・活動領域の境界ともなりうるような自然流路の検出が調査の主な成果である。



第９図　本調査区土層実測図①（S＝1/50）





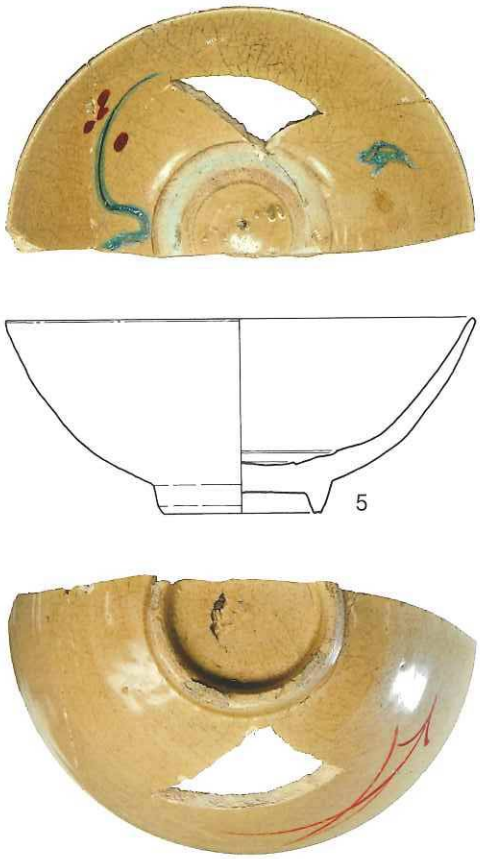
1　茶褐色土　シルト，サラサラしている。
2　茶褐色土　シルトだが，1層に比べしまっている。
3　黄茶褐色土　シルト，サラサラしている。
4　茶褐色土　シルトだが，2層に比べ砂質。
5　茶褐色土　シルトだが4層に比べ砂質。
6　黒色土　シルト，サラサラしている。ジャリまじり。
7　地山

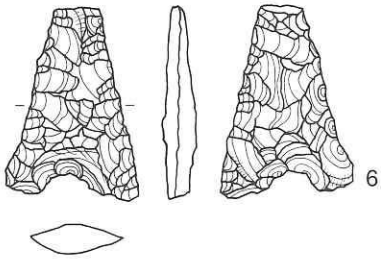
0　3m

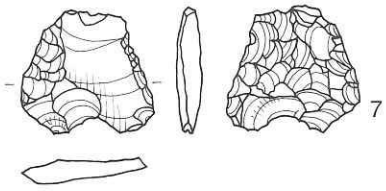
第10図　本調査区土層実測図②（S＝1/50）

第11図　本調査区遺構図（上層図）①（S＝1/100）

第12図　本調査区遺構図（下層面）（S＝1/100）







第13図　出土遺物実測図②（5：S=1/2，6・7：S=1/1）

（西から）

（南から）

調査前風景

図版 2

TP. 1

TP. 2

TP. 2（手前）・TP. 3（奥）

TP. 4

TP. 5

TP. 6

TP. 7

TP. 8

試掘坑掘削状況①

TP. 9

TP. 10

TP. 11

TP. 12（手前）・TP. 13（奥）

TP. 14

TP. 15

TP. 16

TP. 17

試掘坑掘削状況②

図版 4

TP.18

TP.19

TP.20

TP.21

TP.22

TP.23

試掘坑掘削状況③

自然流路

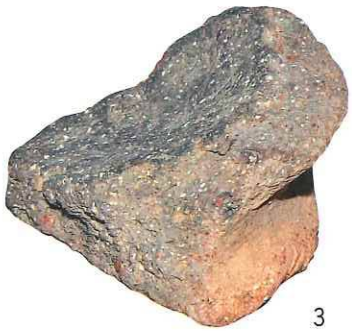
土　　坑

検出遺構

図版 6

1

2



3

4

6

7

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はらやましんでんいせき
書名	原山新田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	本多　和典
編集機関	南島原市教育委員会
所在地	〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地　TEL 050-3381-5080
発行年月日	西暦2010年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
原山新田（はらやましんでん） 遺跡	南島原市（みなみしまばらし） 北有馬町（きたありまちょう）	42214	95-52	32° 40′ 51″	130° 12′ 20″	071026 ～ 080326	267m²	原山地区畑地帯総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原山新田 遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 近世	自然流路 土坑	陶器	

南島原市文化財調査報告書　第３集

原山新田遺跡

2010.3.26

発行　長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷　株式会社　昭和堂